

展望論文

## 中国の社会言語学とその関連領域

彭 国躍 (神奈川大学)

本稿は主に二つの側面から中国社会言語学の研究状況を展望する。一つは80年代以降現れたことばと社会に関する三つの研究分野：社会言語学、文化言語学、民族言語学について概説し、その領域形成の歴史回顧と著書の解題をおこなう。もう一つは次の4つの部分に分けて社会言語学に関する具体的な研究テーマについて概説する。(1) 言語併用と言語接触、(2) 言語変異と言語意識、(3) 言語規範と言語政策、(4) 命名論と敬語論。

最後に中国の社会言語学に見られる次のような特徴を指摘する。(1) 少数民族言語や言語併用問題の研究に著しい成果が現れている、(2) 歴史的、文化論的な視点による考察が目立つ、(3) 数量化による実証研究より記述的研究が多い、(4) 消滅の危機に瀕する言語への対応が今後急がれるべき課題として残っている。

キーワード：社会言語学、文化言語学、民族言語学

## Sociolinguistics in China

PENG, Guoyue (Kanagawa University)

This paper introduces Chinese sociolinguistics in two parts. The first summarizes three main trends relating to the studies of language and society since the 1980s---sociolinguistics, cultural linguistics, and the study of minority languages --- and introduces the formation of the three trends and their related publications.

The second part discusses concrete research themes related to sociolinguistics. These are divided into four categories: (1) bilingualism and language contact, (2) language variation and language attitude, (3) language norms and language policy, (4) naming and politeness.

The paper concludes with a discussion of the four characteristics of Chinese sociolinguistics, namely that (1) the study of minority languages and bilingualism yielded good results, (2) the angle of study bias is towards history and culture, (3) the methods tend to be descriptive and qualitative rather than empirical and quantitative, and (4) the study of dying languages needs improvement.

Key words: sociolinguistics, cultural linguistics, study of minority languages

### 1. はじめに

中国において、ことばと社会に関する研究はさまざまな名目のもとで行われている。“社会言語学”、“文化言語学”、“民族言語学”、“應用言語学”、“民俗言語学”、“法律言語学”、“美学言語学”、“社交言語学”など。これらの領域は、学際的な性格や言語の社会的運用の研究という点では共通点を持っている。ここではそのすべての領域を網羅することはで

きないので、学会の規模や影響力、著書・論集の出版状況などの要素を比較考慮した上で、主に中国の社会言語学、文化言語学、民族言語学という三つの分野に展望の照準をあわせる。この三つの分野は、いずれも1970年代以前から個別の研究として始められ、80年代に学問領域として確立し、90年代に急速な成長を遂げてきた新しい分野である。三分野はそれぞれ異なるスタンス、独自の社会的ニーズに応じて生まれ、発展してきたものだが、実際に刊行、

発表された論著、論文を見ると、扱われる言語現象や研究者の顔ぶれなどにおいてかなりの重なりを持っている。

社会言語学では、主に現代中国社会におけるさまざまな言語問題（言語変異、言語接触、言語政策、言語意識など）が研究されているが、文化言語学では、一部言語変異、言語接触問題を扱いながら、中国の伝統的な言語学（音韻学、訓古学、文字学）の継承や言語と文化（思想哲学、社会歴史、人文地理、文学芸術、民俗風習など）との関係が主な研究対象になっている。そして、民族言語学は、少数民族言語の研究から出発し、現在では国内マイノリティ言語の記述だけでなく、言語接触、言語併用、言語転用、言語政策など社会言語学の課題にまで幅広く展開している。

本稿は、まずこの三つの分野について、領域形成の過程および主要な著書の解題を中心に概説し、それから（1）言語併用と言語接触、（2）言語変異と言語意識、（3）言語規範と言語政策、（4）命名論と敬語論などの具体的なテーマをめぐって、研究論文の紹介に努めながら、中国における社会言語学とその関連領域の研究状況を展望したいと思う。

## 2. 研究分野の概観

### 2.1 社会言語学

中国の言語学界において、言語と社会の関係が注目されはじめたのは、およそ1950年代頃からであろう。羅常培の『語言與文化』（1950）は中国南部地域社会の言語運用実態に関するフィールド調査の成果をまとめ、高名凱の『普通語言学』（1954）、『語言論』（1963）は“社会方言”という概念を導入し、社会的階層による言語変異、言語の社会的属性について理論的な考察を行った。しかし、社会言語学が一つの研究分野として確立したのはほぼ80年代に入ってからである。陳原の『語言與社会生活』（1980）と『社会語言学』（1983）の出版は中国社会言語学の幕開けと見ることができる。陳（1980）は豊かな事例に基づき、言霊信仰、フェミニズムと呼称の問題、婉曲表現と言語タブ、植民地時代とピジ

ン英語、文革中のイデオロギーと言語汚染など社会生活の中で生きていることばの諸相について考察したが、陳（1983）は五四運動以来の言語論争の社会的意義から言語情報理論とノイズ、意味の曖昧性、外来語と言語接触問題など社会言語学にかかわるさまざまな問題について幅広く議論した。

80年代前半中国の言語学界において“社会言語学”という術語はまだ馴染みの薄い存在であった。その時期に海外主に欧米社会言語学の理論と現状の紹介が急増した。祝曉瑾編による『社会語言学譯文集』（1985）はその代表的なものである。この翻訳論文集にはBernstein, Ferguson, Fishman, Gumperz, Hymes, Labov, Trudgillなどによる重要な論文が多く含まれ、後の中国社会言語学の発展に少なからぬ影響を与えた。

80年代後半から90年代にかけて社会言語学関連の著書が相次ぎ刊行された。陳松岑の『社会語言学導論』（1985）、陳原の『社会語言学專題四講』（1988）、孫維張の『漢語社会語言学』（1991）、王得杏の『社会語言学導論』（1992）、祝曉瑾の『社会語言学概論』（1992）、戴慶厦の『社会語言学教程』（1993）、徐大明、陶紅印、謝天蔚の『当代社会語言学』（1997）など。これらの著書の出版は多様で幅広い視点による専門的解説書の提供や中国での社会言語学の確立に大きく寄与した。

その中で、陳松岑（1985）は狭義的社会言語学、つまり言語の変異問題を中心に、欧米社会言語学の成果を紹介し、著者オリジナルの調査データをまじえながら、言語変異の社会的要因（文化、民族、地域、階層、職業、性別、年齢など）について論じたが、陳原（1988）は規範と変異の相互作用、言語と文化の関係、言語の情報論的基礎および定量調査の意義などについて講じている。祝（1992）は海外社会言語学理論の紹介のほかに、中国での言語接触、言語併用および言語文字計画問題に多くの紙面を費やした。戴（1993）は、大量の少数民族の言語データを使い、言語の社会的変異問題のほかに、言語と民族問題、言語と国境の関係、言語接触および言語併用の問題などを扱っている。そして徐、陶、謝（1997）は語用論や談話分析、異文化コミュニケー

ション、言語習得理論などに関する新しい成果を取り入れたことが一つの特色である。

これまで社会言語学大会の論文集として語言文字應用研究所社会言語学研究室編の『語言・社会・文化』(1991)、劉煥輝、陳建民編の『語言交際與交際語言』(1993)と陳建民、譚志明編の『語言與文化多学科研究』(1993)などが出版されている。

90年代に入ると、海外の社会言語学界との交流も活発になり、Trudgill, Hudson, 真田信治などの社会言語学者の著書が次々と翻訳出版された。真田の『日本社会言語学』(1996)は著者が中国語版のために書き下ろしたもので、その翻訳出版によってはじめて日本の社会言語学が中国に紹介され、読者の目を一新した。

## 2.2 文化言語学

言語と文化の関係についての研究は、1930~40年代羅常培、李方桂、趙元任などによる大量のフィールド調査、およびその成果の一部として刊行された羅常培の『語言與文化』(1950)に端を発したものである。羅(1950)の中で取り上げられたテーマは、現在でも興味を引くものばかりである。たとえば、「ことばの語源にみる文化の遺跡」、「借字からみる文化の接触」、「地名からみる民族移動の足跡」、「姓、氏、名、号からみる民族の起源と信仰」、「チベットビルマ族の父子連名制」、「親族呼称からみる婚姻制度」など。この本は、中国の社会言語学や民族言語学の先駆とも言われ、80年代に入り再び注目を浴びるようになり、1989年に版を重ねた。

現在の文化言語学の流れを作った先駆的な著書として周振鶴、游汝傑の『方言與中国文化』(1986)を上げることができる。この本は、羅(1950)の方法論を受け継ぎながら、「方言形成と移民の歴史」、「方言地理と人文地理」、「言語化石と栽培食物の発展史」などのテーマを通して、文化的、歴史的な背景の中で方言現象を解釈する新たな試みである。

80年代後半から、文化言語学関係の論著や論集が多く出版されるようになった。その代表的なものは、申小龍の『中国句型文化』(1988)、『中国文化語言学』(1990)、『文化語言学』(1993)、陳建民の

『語言文化社会新探』(1989)、邢福義編の『文化語言学』(1990)、游汝傑の『中国文化語言学引論』(1993)、沈錫倫の『中国傳統文化和語言』(1995)などである。

申(1988)は『左傳』の構文研究を通して、中国語の文構造と中国文化の型、漢民族の表現心理との関係について論証し、「氣韻」、「神攝」、「透視法」など文学論、芸術論の概念を導入して中国語の構文的特長を記述し、欧米型の「主-述」構文論と異なる視点による構文研究の可能性を提示した。陳建民(1989)は、人名地名、看板広告用語、呼称、文化大革命時代の言語など社会的文脈の中での言語運用問題について論じたことから、文化言語学の中の社会派とも言われている。申(1993)は、「領域境界が不明確」、「理論、方法論の開発が遅れる」など文化言語学に対する国内外からの批判と意見を受け、その理論的、文化哲学的基礎の確立およびその研究対象の規定、方法論の開発などに努めた。游(1993)は言語接触と文化接触、人名地名の文化的意味などのほかに、言語と文学、戯曲、音楽との関係について論じたところが一つの特徴と言える。沈(1995)は、古代トートテム(龍、鳳)、世界観(陰陽、五行)、価値観(中庸、大一統)、審美観(正、円、対称性)、宗教観(鬼、神)、衣食習慣などの文化現象と言語との関係についてのより文化論的な視点による考察である。

文化言語学大会論文集として申小龍、張汝倫編の『文化的語言視界』(1991)、戴昭銘編の『建設中国文化語言学』(1994)、邵敬敏編の『文化語言学中国潮』(1995)などが出版されている。

## 2.3 民族言語学

“民族語言学”という術語は、広義的には「ethnolinguistics」という意味としても理解されているが、中国においては、もう一つの特定の意味を持っている。中国では慣習的に漢民族の言語は“漢語”と言い、非漢民族の言語は“少数民族語言”または“民族語言”と呼んでいる。したがって、中国の“民族語言学”は狭義的には国内の少数民族言語の研究を指す。

中国では漢民族を除いて55の少数民族の間で、シナ・チベット語族、アルタイ語族、南アジア語族、南島諸語、インド・ヨーロッパ諸語の5つの系統に跨る約80種類の言語が使われている。少数民族の生活地域の多くが漢民族や他の少数民族の生活地域と重なる雑居地帯に位置するため、そこでは言語接触や言語併用は日常的に行われている。したがって、民族言語学の研究成果には、音韻、文法、語彙などにおける言語の構造的な研究だけでなく、新言語、ピジン・クレオール発掘の外に、言語接触、言語併用、言語政策など社会言語学関連の内容が多く含まれている。

民族言語学の確立に大きく貢献した研究として1956年に実施された大規模な少数民族言語調査を上げることができる。中国科学院少数民族言語研究所を中心とする総勢700人の調査チームが1,500の調査地点において42の民族言語についてその言語と方言の実態や使用文字の種類、常用単語、文法用例、音韻系統の調査および大量の口承文学資料の蒐集などが行われた。その後1960年にはドーロン語とヌー族の使用言語、1976年にはヒマラヤ南麓の少数民族言語など、56年の調査でカバーできなかった地点において小規模のフィールドワークが継続的に行われた。

近年、民族言語学研究で最も注目すべき成果は、中国社会科学院民族研究所編の『我国少数民族語言使用情況和文字問題調查研究』（全四巻）（1993～1995）である。その内の一巻『中国少数民族語言使用情況』（1994）は、同研究所言語室が1986年から2年かけて中国のほぼ全域にわたって5つの自治区、30の自治州、113の自治県および少数民族が住んでいる15の省で行われた大掛かりな調査の結果をまとめた資料集である。その中で全国各少数民族人口の主要分布とその言語使用情況、特にこれまで数量化されたことがなく、全体像がつかめなかった言語併用、言語転用の実態が浮き彫りになった。

近年行われたもう一つの大規模な調査は、中国社会科学院とカナダケベック州ラバール大学との共同研究で実を結んだ『世界各国語言的構成—中国部分』

（1995）である。約10万人のインフォーマントを対象とするこの調査は中国の民族分布と言語状況、特に行政、立法、宗教、教育、出版、放送、鉄道などの各社会的領域における言語使用の実態を調べたものである。この研究成果は中国語、英語、フランス語で同時出版されている。

民族言語学の著書として、王遠新の『中国民族語言学史』（1993）と『中国民族語言学論綱』（1994）、戴慶厦の『語言和民族』（1994）、周耀文の『中国少数民族語言使用研究』（1995）、傅懋勤の『論民族語言調查研究』（1998）、余惠邦の『双語研究』（1995）などがある。

王（1993）は少数民族言語研究の歴史について、王（1994）は民族言語学の方法論、特徴、研究対象、21世紀への展望について論じている。戴（1994）、周（1995）、傅（1998）はそれぞれ理論と実態調査を含めた著者の民族言語学関連の論文集である。余（1995）は中国少数民族地域における言語併用問題に関する論文や論著の抜粋およびそれに関連する法律規定をまとめた資料集である。

1998年9月に新疆大学で開催された民族言語学会第7回大会では、「言語政策」、「言語併用」、「言語教育と二言語教育」、「言語、文化と翻訳」、「古代文字文献」などを含めた9つの分会上で85本の論文が発表された。その幅広い研究成果から民族言語学と社会言語学、文化言語学との深い関係をかいま見ることができる。

以上の概述を通して、中国における社会言語学、文化言語学、民族言語学という三つの分野がそれぞれ独自の中心的な守備範囲を抱えながら、互いに重なりあう状況を見て取ることができる。そして時には、領域争いの一面も見られる。たとえば、申（1990、1993）と邢（1990）はそれぞれ社会言語学と民族言語学を文化言語学の一部門として捉えるのに対して、王遠新（1994）はこのような捉えかたに異議をとなえ、民族言語学の独立性を主張している。そして陳章太の「20世紀的中国社会語言学」（1998）では文化言語学と民族言語学を社会言語学の一部として位置付けている。



### 3. 研究テーマの概説

以下、三つの分野における研究者自身の位置付けにかかわらず、言語と社会にかかわるさまざまな課題の研究成果について、研究論文を中心に概説していきたい。

#### 3.1 言語併用と言語接触

1990年の調査によれば、中国における少数民族言語と中国語との二言語併用人口は約1,600万人、少数民族言語から中国語に転用した人口は約1,800万人にのぼり、それぞれ少数民族人口の18%と20%を占めている。(周耀文1995: 150-152) 中国では1980年代に入り言語併用の問題に関する理論的研究や実態調査が急速に増えた。中国における言語併用の現状と歴史について、馬学良、戴慶厦の「我民族地区双語研究中的幾個問題」(1984)、戴慶厦、王遠新の「論我民族的語言轉用問題」(1987)、戴慶厦、傅愛蘭、劉菊黄の「新蒙郷双語調査報告」(1988)、趙益真、林少棉の「壮漢双語現象的形成和發展」(1990)など数多くの研究がある。

馬、戴(1984)は中国における言語併用の歴史と類型および現在直面している問題点について議論し、戴、王(1987)は各民族における言語転用の類型について分析した。戴、王(1987)によれば、中国では転用の対象言語によって①少数民族→漢民族言語(回族、満族、トゥツァ族など)、②少数民族→他の少数民族言語(タタール族→ウィグル語など)、③漢民族→少数民族語(自治区内一部の漢民族)の三つの類型、そして転用の規模によって①全域転用(回族など)、②大部分転用(満族、ショー族など)、③局部転用(湖南省内のウィグル族など)の三種類にそれぞれ分けられる。戴、王(1987)はこれらの類型と規模が形成した歴史的背景と転用後言語に対する基層言語の影響などについて考察した。

雲南省通海県新蒙郷に住むモンゴル民族は、13世紀に南下した元王朝の遠征軍の末裔である。その使用言語は7百年の間にモンゴル語からチベットビルマ語族に属するイ語の一変種へと転用した。現在では全域において中国語との二言語使用地域となっ

ている。戴、傅、劉(1988)は言語転用の長い歴史を持つこの地域の各村や家庭内の使用言語に関する興味深い調査報告である。

趙、林(1990)は広西省チワン族地域における言語使用とその歴史について考察したものである。現在のチワン族地域では、東部は中国語との併用地域で、西部は中国語の影響が見られない地域である。このような地域分布は2千年前に秦始皇帝がチワン族地域東部に3つの郡を設けたことから端を発した。チワン族の二言語使用は言語接触の長い歴史の産物である。趙、林(1990)は、チワン族の例から、言語併用は単純に大言語が小言語を併合していく過程と見るべきではなく、長く安定した二言語使用は自民族文化の発展と民族間の相互交流の促進に寄与するものと考えている。

1997年以後香港は世界で初めて中国語と英語による二言語法律を実施する地域となった。しかし、単一言語(英語)の法律から二言語法律への移行作業は早くも1984年『中英共同声明』が調印された時から始まった。1989年に香港立法史上初めての二言語法律『1989年証券および先物取引事務監査委員会規定』が成立し、1995年に初めての中国語による民事訴訟案が受理された。姚徳懐の「英文為準與中文為準—香港中文的一個難題」(1996)と李昌道の「香港双語法律的現状和發展」(1997)は、香港返還直前までの二言語法律の制定、二言語立法、二言語司法の実施状況とその問題点について論じている。

多言語社会において言語接触や、接触による言語間のコード切り替え現象が多く現れる。マカオは中国語(北京語、広東方言、福建方言)、ポルトガル語、英語、タイ語、日本語などが使われる多言語社会である。程祥徽、劉羨水の「澳門的三語流通與中文的健康發展」(1991)と黄翌の「澳門語言社会在語際交流中的語碼轉換」(1999)はマカオ社会における言語接触および接触による言語間のコード切り替えの問題、ピジン中国語、言語忠誠、言語差別の問題に関する研究である。

ピジン英語は17世紀~19世紀にかけて中国南方地域ではやっていたが、20世紀半ば中華人民共和

国成立後に急速に衰えた。陳原の「語言汚染與浄化」(1998)はピジン英語の特徴、その発生と消滅について論じた。

近年中国の少数民族地域で異なる系統の特徴をあわせ持つクレオールがあいつぎ発見された。青海省同仁県のトゥ族地域では、中国語、チベット語および一部のアルタイ語の特徴を持つ「五屯語」が使われている(陳乃雄の「五屯語初探」1982)。「五屯語」のほかに、近年甘粛省では「河州語」、甘粛省トンジャン族自治県では「唐王語」、広西では「五色語」、新疆では「アエヌ語」など多くのクレオールが報告されている。これらの混合語はいずれも漢民族と少数民族、または二つ以上の少数民族間の言語接触によって生まれた新しい言語である。

中国では、各地域で長年の言語接触によって新しい言語の形成が相次ぎ報告される一方、多くの言語は消滅の危機に陥っている。何俊芳の「也論我国民族的語言轉用問題」(1999)は、中国社会科学院とラバール大学との共同研究(1995)の統計結果に基づき、二言語使用と言語転用の実態を分析し、ケーラオ、トゥチア、ショー、満、ヘジェンの5つの民族が自民族の言語を放棄し、言語併用から言語転用へと変わりつつある現状を指摘した。同時に、これらの言語変化は緩やかに行われるもので、必ずしも現段階で中国において大規模な言語転用が行われることを意味するものではないと何(1999)は強調している。

しかし、中国において言語消滅がすでに等閑できない問題になっていることは確かである。雲南省リス族自治州に住むアノン族は約6,500の人口を有する小さな民族である。その母語アノン語の使用者は近年早いスピードで減少している。孫宏開の「記阿儂語一對一個逐漸衰亡語言的跟踪觀察」(1999)は1960~1999年の間に6回にわたって、消滅への道をたどっているアノン語への追跡調査の結果について報告した。それによると、1960年に800人いたアノン語使用者人口は、1983年に約500人に減り、1995年には410人、1999年調査推定では400人未満となっている。その間、アノン語の中で外来語の数が急激に増え、村全体で隣接民族の言語リス語と

の間の二言語併用者やリス語への転用者が急増した。そして個人レベルにおいて60年代調査のインフォーマントが80年代になると、以前みずから提供したアノン語情報についても記憶が薄れるという忘却現象が観察された。孫(1999)は一つの言語が消滅していく過程で、その言語構造内部、言語集団、そして個人レベルにおいてなにが起きたかについて細かく記録している。

### 3.2 言語変異と言語意識

言語の地域変異は伝統的な方言研究とも重なり、その成果の全体像について本稿では扱いきれないので割愛せざるを得ないが、ここではその新しい動きの一つ「方言島」の形成とその文化的背景に関する研究を紹介したい。方言島とは一つの方言が他の方言または言語の分布地域の中で完全に包囲された形で分布している状態を言う。游汝傑の「漢語方言島及其文化背景」(1992)は、中国語方言島研究の草分けである。游(1992)は中国語のさまざまな方言島の形態について、①広い分布を持つ巨島型、②狭い地域に分布する孤島型、③他の方言区に点在する群島型、④帯状に分布する列島型、⑤二重周囲分布の中島型、⑥移動する浮島型、⑦海と他の方言には含まれる沿海拠点型という七種類に分け、歴史上起こったさまざまな社会的現象(遷都、戦争、開拓、飢饉など)を通して方言島の形成とその文化的背景について考察した。游(1992)によれば、呉方言地域に分布している杭州「半官話」方言島は1127年宋王朝の南遷によって形成されたもので、北方方言の特徴を持つ浙江省金郷方言島は500年前の明王朝の軍隊駐屯地と重なり、細長くのびる江西省の「平話列島」は古官道に沿った形で分布しているため古代の交通網と深く関係し、そして広東北部客家方言地域内の浮島型方言「船話」は水上民の生活形態によってもたらされたものである。このように歴史的、文化的背景に関連付けることにより現代方言の地域分布に関する多くのなぞが解けてくる。

北京語を基礎とする中国語の標準変種「普通話」は、この20年間学校教育やマスコミなどの影響により、早いスピードで地方に広がっている。鮑明燁

の「六十年来南京方言向普通話靠攏情况的考察」(1980)は、南京方言が1940年代後半から江蘇省や安徽省からの人口流入により、江蘇北部方言と安徽北部方言へと急接近し、50年代からもとの南京方言にあった尖團音(舌尖前音と舌面前音)対立が消失し、y韻がi韻から独立するなど標準語形に急速に近づく現象について考察した。そして、標準語の普及により標準語地域とされる北方方言地域内部でも地域差が縮小し、より標準的な形態へと変化する傾向が見られる。劉虹の「大連話語音差異與社会因素之間的關係」(1986)は大連における標準語音の浸透とその使用者の社会的属性に関する研究である。北京語の中でそり舌摩擦音 [ʒ], [ts], [tsʰ], [ʃ] と円唇介音 [u-] の入った語は、従来の大連方言では [φ~1], [ts], [tsʰ], [s] と [φ-] のように発音される。しかし、近年では、従来の大連方言になかったそり舌摩擦音と円唇介音が標準変異の一種として現れるようになった。劉(1986)は標準異形の出現と話者の社会的属性(職業、学歴、年齢、性別)との関係について考察し、数量的分析を通して、公務員、企業の管理職員、高学歴者、職業を持つ女性などが発音変項の社会的意味により敏感で、社会的威信の高い標準異形をより多く使う傾向を明らかにした。

中国語の性差に関しては、これまで主に北京若者の間で現れた“女国音”と言われる現象について議論されていた。北京では若い女性を中心に、舌面前音の [tɕ], [tɕʰ], [ɕ] を発音するさいに舌の位置が前に移動し、舌葉音の [tʃ], [tʃʰ], [ʃ] または舌尖前音(齒茎音)の [ts], [tsʰ], [s] と発音する現象がある。このような性差的特徴をもつ発音は、1920年代から黎錦熙などの言語学者によって指摘され、“女国音”と呼ばれていた。曹耘の「北京話語音里的性別差異」(1986)と「北京話 tɕ 組声母的前化現象」(1987)および胡明揚の「北京話“女国音”調査—1987」(1988)は「女国音」に関する実態調査を行った。これらの舌位前移現象は日本語における「サ行子音のゆれ」に類似する点があり、都染(1992)によって日本にも紹介されている。一方、一説北京の「女国音」に影響を与えたとも言われた

蘇州方言では、舌位後移化現象、つまり、舌尖前音 [ts (-iʔ)] が舌面前音 [tɕ (-i)] へと変化していることが、中国人民大学方言調査グループの「蘇州方言三項新起音变的五百人調査」(1988)で明らかになった。そしてその変化は若い人の中で顕著に現れ、しかもその傾向は男性ほど強いことが分かった。その原因について、北京標準語の影響が上げられている。蘇州方言はもともと男女とも舌尖前音“尖音”と舌面前音“團音”を区別し、発音が一般的に「柔らかく、上品で、女性的」と評価されているが、舌位後移化傾向は、蘇州人とくに蘇州男性がより男性的発音を求めることを意味するもので、北京の「女国音」現象とは対照的でおもしろい。

中国語の世代差は、とくに社会的変化の激しい都市部において顕著に現れている。近代において中国の沿岸部に新しい都市の形成により多くの都市型方言が生まれた。上海方言はその一つである。上海方言は20世紀前半大量の人口流入により、蘇州を中心とする地域方言の一派から上海を中心とする地域共通語へと脱皮したが、20世紀後半人口流動の安定期に入り、地域内部で各地から入った発音や語彙などの統廃合が行なわれ、現代都市方言としての新派上海語が形成した。許宝華、湯珍珠、湯志祥の「上海祖孫三代語言情况的抽樣調查」(1988)は、3世代とも上海市生え抜きの家族サンプルを市内10区に1家族ずつ抽出し、3世代間の音韻、声調の変化を調べた。その結果、第1世代(老年層:60~80代)は、舌尖前音と舌面前音を区別し、両唇摩擦音 [Φ], [β] を有し、一部の人は吸気破裂音 [ʔb], [ʔd] を保持し、6種類の声調を持っているが、第2世代(中年層:30~50代)においてはほとんど舌尖音と舌面音の区別をせず、いずれも舌面前音として発音し、両唇摩擦音が唇齒摩擦音 [f], [v] に、吸気破裂音が破裂音の [p], [t] にそれぞれ変化し、声調は6種類と5種類タイプが混在している。そして、第3世代(若年層:10代)においては完全に舌尖音と舌面音の区別が消え、両唇摩擦音や吸気破裂音もなくなり、声調もきれいに5種類に落ち着いたことが分かり、新派上海語が形成するプロセスの一端がこの調査によって明らかになった。ほか

に兪光中の「上海話副詞的年齡層次差異」(1988)は、副詞という語彙レベルにおける上海語の世代差について調べ、旧式の上海語表現が70年代以後早いスピードで衰退し、新しい語形が標準語形に近づきつつある実態を明らかにした。

広東省東部に位置する汕頭市は、清王朝の17世紀後期から初めて人が移り住んだ小さな漁村であったが、1930年に正式に市と昇格された時に人口が6万人に増え、現在では約43万人を有する地方都市となった。70年の間に移民の大量流入に伴い、従来の地元のことばと大きく異なる新しい都市型方言が形成した。施其生の「從口音的年齡差異看汕頭音系及其形成」(1991)は汕頭市出身者の年齢層間の発音変化を調べることで、年齢層が高い人ほど非汕頭系発音の傾向が強く、汕頭方言音形成の時期が1930～40年代の間にあることをつきとめた。

言語変異現象の一つである隠語は、ある集団内部の秘密を保持すると同時に、メンバー間の連帯感を強める働きを持っている。山西省長子県人の理容師集団では、長い間複雑な職業隠語が使われてきた。たとえば、集団内では刷毛を[suei ɿyer] (魚)、耳を[məʔ ʔ] (きくらげ)、父親を[ʔo seʔ ɿ xar] (まじめな人)、未成年の息子を[ʔio ʔpan tərʔ] (小さな腰掛け)などと表現する。侯精一の「山西理髮社群行話の研究報告」(1988)はその理容師集団の職業隠語の形態とその表現特徴を記述し、隠語とその集団の社会的地位、地縁による排他的性質との関係について考察した。職業隠語についてはほかに、潘家懿の「山西晋南的秘密語一言話」(1991)は山西省で使われる5種類の職業隠語(編物職人隠語、戯曲界隠語、理容師隠語、葬儀業隠語、石堀職人隠語)について、林倫倫の「廣東揭西棉湖の三種秘密語」(1996)はかつて廣東省揭西県で流行していた3種類の商業秘密語とその反切を利用した音韻特徴などについて、そして邵朝陽の「澳門博彩隠語研究」(1999)はマカオ賭博業界の隠語表現について、それぞれ記述している。外に趙麗明の「湘西苗族隠語の使用情況和社会功能」(1991)は湖南省少数民族ミャオ族の間で使われた生活隠語とその社会的分布(恋愛活動、祭祀活動、政治活動)について

報告している。中国における隠語の類型、歴史、社会的分布については曲彦斌の『中国民間秘密語』(1990)がその重要な参考資料になる。

複数の言語が置かれる社会的状況の変化は、必ず人々の言語意識に影響を与え、そしてその言語意識の変化は何らかの形で人々の言語行動や、コード選択の動機づけとなる。香港は1997年9月にイギリス植民地統治が終結し、中国主権下の特別行政区となった。その影響で香港社会における中国語(北京語)の地位も変わり、北京語に対する香港人の言語態度にも微妙な変化が生じた。龍恵珠の「港人對廣東話及普通話態度的定量與定質研究」(1998)は香港返還前の1994年に行った調査に基づいて、返還日が迫ってくる中での香港人の北京語と広東語への言語態度の変化を分析し、80年代北京語を外族方言と見なし、マイナス評価が多かったのに対して、90年代に入って政府機関における公用語地位の確立や就職の有利な条件になるなど、その社会的機能の変化に影響され徐々にプラス評価に転じていった実態を明らかにした。

李明潔の「上海市泛尊称使用的社会分層」(1998)は、上海語呼称表現への言語態度に見られる社会的属性に関する意識調査である。上海出身者1034人を対象とするアンケート調査を通して、社会的要素(年齢、職業、学歴、収入)が丁寧な呼称表現「同志、先生、師傅、老師、朋友、太太、老板、小姐」に対する言語態度に与えた影響について計量分析を行なった。分析の結果、50年代から使われ続けてきた表現「同志、師傅」と呼ばれることに対して人々は抵抗を感じるものが少なく、それに対する年齢、職業、学歴、収入などの社会的属性による影響が少ないのに対して、1949年社会主義革命以前に使われ60～70年代に一時使用されなくなり80年代に復活した表現「老板、小姐、先生」などに対する受け手の社会的属性による影響が大きいこと、そして社会的属性の中で、学歴と職業の要素は、収入と年齢要素より呼称に対する言語態度や呼称選択に与えた影響が大きいことが分かった。

### 3.3 言語規範と言語政策

中国での言語規範と言語政策はかなり長い歴史を持っている。『論語』によれば、孔子は公式の場での発言や教育、編纂活動においては地元魯国（今山東省）のことばを使わず、当時の標準語“雅言”を用いたという。このことは周王朝時代（紀元前1066～前222）に中国大陸においてすでに言語の規範意識および広範囲に通用できる標準変種が存在したことを物語る。漢王朝時代（紀元前206～219）には、“雅正”（標準語化）を行うために、王朝政府内で“雅言”の発音を定める“正讀”の官職を設けたことから、当時国家行政としての言語規範政策がはじまったことが分かる。戴昭銘の「説“雅正”——中国古代語文規範理論初探」（1995）は古代中国における言語規範意識の形成、発展の歴史および後世の言語政策への影響について論じている。そしてその研究をさらに発展させた戴昭銘の『規範言語学探索』（1998）は、中国の言語政策に理論的根拠を与える規範言語学の確立を訴える力作となった。この本は「理論編」、「史論編」、「応用編」の三部分に構成されているが、理論編では言語規範の本質と方法論について、史論編では古代“雅正”の理念から近代「白話」運動、現代標準語政策までの歴史について、応用編では言語表現の正誤判断の基準、方法およびその社会的意義について論じている。

そのほかに、李建国の「傳統語文規範及其現實意義」（1996）は周代雅言の確立、秦始皇帝の「書同文」（文字統一）政策、漢代の官吏書体の規定、唐代の五経文字の国家モデル『字様』の制定、清代の国家事業としての『康熙字典』の編纂など歴代王朝の言語文字政策とその成否について論じ、許嘉璐の「語言文字規範化與語言文字研究」（1996）は中華人民共和国成立まもなく開かれた「全国文字改革會議」（1955 中央教育部と中国文字改革委員会主催）と「現代漢語規範問題學術會議」（1956 中国科学院主催）を出発点とし、その後40年間の言語文字政策の歴史を回顧したが、張普の「關於網絡時代語言規劃的思考」（1999）は80年代中国言語政策の転換（1985年「中国文字改革委員会」が「国家語言文字工作委员会」に改名され、その下位組織として「中

文情報司」（中国語情報署）が新設された）の背景を論じながら、情報化時代に適応する言語規範政策、インターネット上の言語管理モデルなどについて模索した。

1979年に設立した全国少数民族地域の小中学、高校、大学の教員を中心とする学会組織「少数民族漢語教学研究会」は1985年に「双語研究会」に改名された。これは少数民族地域において単一言語の中国語教育の推進から二言語教育の推進へと言語政策方針の転換を象徴するできごとである。少数民族の二言語教育に関しては、周耀文の「從雲南民族地区的語言實際出發建立小学双語文教学体制」（1986）と「論在我国民族地区建立多種形式的双語文教育体制」（1992）、余惠邦の「略論四川民族地区的雙語現象和雙語教育」（1986）、方曉華の『新疆雙語教育問題探索』（1998）、全炳善の「延辺朝鮮族的雙語教育」（1992）などがある。

周（1986）は23の少数民族の間で25の言語（チンポー族とヨー族はそれぞれ2種類の言語を有する）が使われる雲南省地域で小学校から二言語教育を実施する必要性と現行の二言語教育の実態について論じ、周（1992）は中国少数民族地域において多様性に富んだ二言語教育モデルの必要性を訴えている。余（1986）は、四川省では366万の少数民族人口を抱えながら、新疆、青海、内モンゴル、延辺などの地域に比べ二言語教育の体制が整っていない現状および涼山イ族地域での二言語教育の試行状況を紹介し、教員養成の遅れなどの切実な問題点を提起している。方（1998）によれば、中国新疆ウイグル自治区において小学校では民族言語を主、中国語を副とし、中学校、高校では人文科学授業を民族言語で、自然科学授業を中国語で教え、大学教育では中国語を主とする独特の二言語教育モデルを実施している。

延辺朝鮮族の二言語教育は100年ぐらいの歴史を持っている。清王朝や帝政日本統治下での二言語教育は中国語や日本語を主とするもので、最終的には朝鮮語をなくし民族同化を実現することを目的としていた。中華人民共和国時代でも50年代から70年代にかけて二回ほど民族融合を目的にかかげ、小中学校や高校、大学での朝鮮語授業を削減し、中国語



中心の教育を実施していた。しかし、80年代に入り、二言語教育は民族同化の道具から、異民族長期共存の手段へと見直されるようになった。1980年に延辺州で開かれた第2回朝鮮語文工作会議で、朝鮮語が延辺地区の第1通用言語であることを明確にし、1985年に公表された『延辺朝鮮族自治州条例』で、「自治州各機関の行政通用語として朝鮮語と中国語を使用することができる。朝鮮語を主とする」と明記した。全(1998)はこのような延辺地区における二言語教育政策の歴史および学校教育の現状について論じている。

少数民族地域における二言語教育政策の実施は多民族国家である中国にとってきわめて重要な政策転換といえる。一方、漢民族内部でも互いに意思疎通ができないほど方言差がはげしいため、標準語(普通話)の普及は依然言語政策の中心的な課題として推し進められている。2000年10月「中華人民共和國国家通用語言文字法」が成立し、その中で標準語の国家公用語としての法的地位、標準語普及政策の法的根拠が明示されている。

中国の文字計画は、20世紀の半ばから主に漢字ローマ字化、漢字簡略化、表音綴りローマ字化を中心に推し進められてきた。漢字ローマ字化は今世紀初頭から銭玄同、瞿秋白、魯迅などのインテリ、特に進歩的知識人と言われる人々の間で主張され、50年代から毛沢東、周恩来の指示のもとで政府文字計画の最終目標としてかけられたが、その後40年の間、漢字ローマ字化の必要性和可能性に関するさまざまな実験を通して正式の文字としてのローマ字使用は現実に実行不可能であることが認識され、1986年に国家言語文字工作会議で漢字ローマ字化政策の中止が決定され、そして、2000年に成立した「国家通用語言文字法」の中で漢字は中国の国家公用文字として明確に規定された。これにより「漢字=封建性、閉鎖性、非合理性」というイデオロギー先行のローマ字化運動について終止符が打たれた。一方漢字簡略化は、1955年に一回目の「漢字簡略化案」が公表されて以来その普及に一応成功したけれども、旧式の繁体字がさまざまな場(海外向けの新聞、古籍書、広告看板など)で存続しつづけた

め、結局長期間にわたり二通りの漢字が流通するという問題点を残している。もう一方の表音記号「拼音」は発案当初正式の文字が漢字からローマ字へと移行する過渡期の代案として期待されたのだが、いまではその期待は外れたものの、漢字の音声表記として言語教育、辞書編纂、コンピュータ通信などに欠かせない存在としてすっかり定着した。呉玉章の『文字改革文集』(1978)、周有光の『漢字改革概論』(1979)、武占坤、馬国凡の『漢字・漢字改革史』(1988)などはそれぞれの立場から、近現代中国文字政策のあゆみとその経験教訓をまとめたものである。

少数民族地域社会における言語政策は、前述の二言語教育問題のほかに、文字創造と文字改革問題にも反映されている。道布の「中国的語言政策和語言規劃」(1998)は、人民共和國成立以来の言語政策、特に少数民族言語の政策およびその管理体制と機構、少数民族文字創造の必要性和現状などについて論じたものである。蘇金智の「語言的声望計画與双文字政策」(1993)は少数民族文字政策における言語威信、文字威信研究の必要性を訴え、民族言語新文字の推進と普及は新文字の社会的必要性だけでなく、新文字創造機関の権威性和文字仕組みそのものの合理性およびその社会的機能による威信の確立が不可欠であると主張している。

中国南部の少数民族の多くは山間地域に住み、分散した多民族雑居形態を有している。同一言語の中で各方言の分布は時には強勢方言が定まらないモザイク状態を呈し、各地域で使われる文字形態もばらばらである。たとえば、中国のタイ語には4種類の文字が使われている。互いに表音体系や文字形態が異なり、使用地域間の交流も少なく、統一しなければならない社会的必要性もない。周耀文の「中国南方少数民族使用方言文字的語言依据和社会依据」(1993)は、同一少数民族において文字統一を文字政策の目標とするこれまでの考え方に異議を唱え、現行諸方言文字の存在理由、その言語的、社会的根拠について分析している。



### 3.4 命名論と敬語論

命名論の研究成果の多くは、地名や人名の形成とその社会的、文化的影響を考察したものである。

地名に関する代表的な研究として李如龍の『漢語地名学論稿』(1998)と張清常の『北京街巷名称史話—社会言語学的再探索』(1997)を上げることができる。李(1998)は中国地名の語彙体系、命名法、地名類型の地理的分布、地名の語源的意味およびその文化的、時代的特徴に関する命名論の専門書である。李(1998)の体系論に対して、張(1997)は、北京という特定地域内での地名の形成と変化およびそれと地域社会の民族人口の分布、産業形態の変化などとの関係について考察し、特に各時代における改名の歴史と社会的意識の変化などについて詳しく論証している。

羅美珍の「泰、泰語地名結構分析及地圖上の音譯漢字」(1999)は中国とタイの国境をはさむ南ウチャン川、メコン川流域の地域名について考察し、その構造パターンと意味の分析を通して、地名に反映された古代タイ族先住民の移動経路や、トン・チワン族と分離した後の中国タイ族とタイ人が持つ共通の封建領主文化、小乗仏教文化の特徵を明らかにした。

王建華の「漢族人名與漢民族文化」(1991)は古代中国の“姓、氏、名、字、号”の語彙的特徴とその社会的役割およびそれに反映された文化的価値観について考察したが、錢奠香、李殿臣の「内地、港澳台以及海外華人姓名用字的比較分析」(1999)は1970年代生まれの大陸および香港、マカオ、台湾などの華人7,699人を対象に、その姓名に使われた語彙を調査した。それにより、人名にもっとも多く使われた漢字は、男性では“偉、華、志、文、明、国、海、宇、東、健・・・”，女性では“華、麗、敏、曉、燕、珍、慧、艷、小、莉・・・”であること、名前の中に家系の世代を表す語を入れる従来の命名習慣がすたれ、一字名が増えたこと、そしてその傾向は大陸がその他の地域より、女性が男性より顕著であることなどが判明した。

中国雲南省南部に住むタイ族は、12世紀から20世紀中ごろまでずっときびしい貴族階級制度が続いた。その社会の中で男性は成長につれて幼名、法名、

俗名、父名、官名へと4回ほど改名する習慣がある。そのうち幼名、法名、俗名と官名にはそれぞれその出身階級の地位を示す語が使われる。周慶生の「泰族人名的等級結構與社会功能」(1998)はタイ族人名の字義的意味を分析し、その表現構造と従来貴族社会の階級制度との関係について考察した。

王青山の「藏族姓名的社会文化背景」(1993)は、『青史』など古代チベット文献に見られる王様の名前における母子連名から父子連名への変化現象と、母系社会から父系社会へと移行する社会的変化との関係および一部のチベット貴族が持つ漢語名字の歴史的背景について考察した。

呂叔湘の「南北朝人名與佛教」(1988)は仏教信仰がもっとも盛んだった南北朝時代(420-583年)の人名とそれに反映された仏教思想および当時の社会的価値観との関係に関する論考である。

現代中国語において敬語表現は主に呼称、人称代名詞、あいさつ語および間接表現などに反映されている。祝曉瑾の「“師傅”用法調査」(1984)は公共の場での観察記録法などを使って丁寧な呼称表現として一般的に使われた“師傅”の運用実態に関する調査研究で、祝曉瑾の「漢語呼称研究—張社会言語学呼称系統圖」(1990)はErvin-Tripp(1972)の呼称モデルを使って、中国語の呼称表現を6種類に分け(①親族呼称、②親族呼称の他用、③姓名呼称、④通用呼称、⑤職階呼称、⑥ゼロ呼称)、それとさまざまな人間関係、社会的コンテクスト(年齢、身分などの上下関係や親族、友人、隣人などの親疎関係など)との関係について記述した。

中国では従来から丁寧な呼称表現として非親族関係の人に対して上位親族呼称表現を使う習慣がある。陳松岑の「北京城区兩代人對上一輩使用非親屬稱謂的变化」(1984)は北京市内の各年齢層が使う呼称表現を調べることで、中老年層から青年層にかけて一般的敬称としての親族呼称の使用語彙が減少する傾向を明らかにした。陳松岑の『礼貌語言初探』(1989)は、一般読者向けの「言語知識叢書」の一冊ではあるが、社会言語学の立場による初の中国語の敬語専門書と言える。礼の概念、礼にかなう行為や言語行動の本質と意義について解説し、現代中国社

会における言語行動や非言語行動に現れたポライトネス現象について考察した。

顧曰国の「礼貌，語用與文化」(1992)は古代中国社会の礼に関する伝統的な解釈、およびそれと現代中国社会の「礼貌」現象との関係を探りながら、現代中国語の敬語表現を制約する語用論の原則(①自卑他尊の原則，②秩序わきまえの呼称原則，③品位保持の原則，④メンツ顧慮の原則，⑤言動一致の原則など)について論じた。そして、中国文化と欧米文化との対照研究の立場から「礼貌」の語用論の原則とLeech(1983)やBrown and Levinson(1987)のポライトネス理論との異同などについて考察を加えた。

#### 4. おわりに

以上、中国の社会言語学とその関連領域の研究状況について、筆者の目が届く範囲内で展望してきたが、中国の社会言語学について、言語の社会的変異問題を中心とする狭義的解釈と、人間の営みを構成するさまざまな社会現象と言語との関係や社会生活における言語運用のあらゆる側面を研究するという広義的な解釈という二つの見方が存在する。「文化言語学」，「民族言語学」を含めた広義的解釈から見れば、中国の社会言語学は、この20年の間に目覚ましい成長を遂げてきたと言える。広義的な立場から中国の社会言語学の特徴について、筆者の印象と感想も含めて次のようにまとめることができる。

- ①言語と社会との関係に関する研究の中で、特に少数民族言語や言語併用問題の研究に著しい成果が見られた。これは多民族国家の現状や80年代以後の民族政策の変化などと深くかかわっている。
- ②歴史的、文化論的な視点による考察が目立つ。それには膨大な古代文献資料が残っているという物的条件と、歴史現象や文化現象により強い関心を示すという中国での学問的風土による影響があったのではないか。
- ③記述的な研究が多いのに対して、数量化による実証研究は主に言語変異や言語併用の実態調査に限られ、全体の中での割合が少ないような印象を受

ける。

- ④消滅の危機に瀕した言語への対応、救済およびその危機意識の向上が今後急がれるべき課題であることを痛感する。

#### 参考文献：(日本語読み五十音順)

- 王遠新 1993 中国民族語言学史 中央民族学院  
 王遠新 1994 中国民族語言学論綱 中央民族学院  
 王建華 1991 漢族人名與漢民族文化 文化的語言视界  
 王青山 1993 藏族姓名的社会文化背景 民族語文5 民族語文雜誌社  
 王得杏 1992 社会語言学導論 北京語言学院出版社  
 何俊芳 1999 也論我国民族的語言轉用問題 民族研究3 民族研究雜誌社  
 許嘉璐, 王福祥, 劉潤清編 1996 中国語言学現状與展望 外語教学與研究出版社  
 許嘉璐 1996 語言文字規範化與語言文字研究 中国語文1 商務印書館  
 曲彦斌 1990 中国民間秘密語 上海三聯書店  
 曲彦斌 1996 中国民俗語言学 上海文芸出版社  
 許宝華, 湯珍珠, 湯志祥 1988 上海祖孫三代語言情况的抽樣調查 吳語論叢 上海教育出版社  
 邢福義編 1990 文化語言学 湖北教育出版社  
 侯精一 1988 山西理髮社群行話的研究報告 中国語文2 商務印書館  
 高名凱 1954 普通語言学 東方書店  
 高名凱 1963 語言論 商務印書館  
 黄翌 1999 澳門語言社会在語際交流中的語碼轉換 中国語文1 商務印書館  
 顧曰国 1992 礼貌, 語用與文化 外語教学與研究 外語教学與研究出版社  
 吳玉章 1978 文字改革文集 中国人民大学出版社  
 胡明揚 1988 北京話“女国音”調查—1987 語文建設 語言文字報刊社  
 真田信治 1996 日本社会語言学 中国書籍出版社(胡士雲等譯)  
 施其生 1991 從口音的年齡差異看汕頭音系及其形成 語言・社会・文化 語文出版社  
 周慶生 1998 泰族人名等的等級結構與社会功能 民族語文2 民族語文雜誌社  
 周振鶴, 游汝傑 1986 方言與中国文化 上海人民出版社  
 周有光 1979 漢字改革概論 文字改革出版社  
 周耀文 1986 從雲南民族地区的語言實際出發建立小学双語文教学体制 雲南民族語文1  
 周耀文 1992 論在我国民族地区建立多種形式的双語文

- 教育体制 双語双方言 2 香港彩虹出版社
- 周耀文 1993 中国南方少数民族使用方言文字的語言依据和社会依据 民族研究 1 民族研究雜誌社
- 周耀文 1995 中国少数民族語文使用研究 中国社会科学院出版社
- 祝曉瑾 1984 “師傅”用法調查 語文研究 1
- 祝曉瑾編 1985 社会語言学譯文集 北京大学出版社
- 祝曉瑾 1990 漢語呼称研究——一張社会語言学呼称系統圖 北京大学學報·英語語言文學專刊
- 祝曉瑾 1992 社会語言学概論 湖南教育出版社
- 邵朝陽 1999 澳門博彩隱語研究 中国語文 4 商務印書館
- 邵敬敏編 1995 文化語言学中国潮 語文出版社
- 徐大明, 陶紅印, 謝天蔚 1997 当代社会語言学 中国社会科学院出版社
- 沈錫倫 1995 中国傳統文化和語言 上海教育出版社
- 申小龍 1988 中国句型文化 東北師範大学出版社
- 申小龍 1990 中国文化語言学 吉林教育出版社
- 申小龍, 張汝倫編 1991 文化的語言視界 上海三聯書店
- 申小龍 1993 文化語言学 江西教育出版社
- 全国人大常委会法制工作委员会 2000 中華人民共和國国家通用語言文字法 中国民主法制出版社
- 錢奠香, 李殿臣 1999 内地, 港澳台以及海外華人姓名用字的比較分析 語文研究 2
- 全炳善 1992 延辺朝鮮族的双語教育 民族語文 2 民族語文雜誌社
- 曹耘 1986 北京話語音里的性別差異 漢語學習
- 曹耘 1987 北京話 t φ 組声母的前化現象 語言教学與研究
- 蘇金智 1993 語言的声望計画與双文字政策 民族語文 3 民族語文雜誌社
- 孫維張 1991 漢語社会語言学 貴州人民出版社
- 孫宏開 1998 20世紀的中国少数民族語言文字研究 劉堅(主編) 20世紀的中国語言学 北京大学出版社
- 孫宏開 1999 記阿儂語一對一個逐漸衰亡語言的跟踪觀察 中国語文 5 商務印書館
- 戴慶厦, 王遠新 1987 論我国民族的語言轉用問題 語文建設 4 語言文字報刊社
- 戴慶厦, 傅愛蘭, 劉菊黃 1988 新蒙鄉双語調查報告 西南民族学院學報
- 戴慶厦 1993 社会語言学教程 中央民族大学出版社
- 戴慶厦 1994 語言和民族 中央民族大学
- 戴慶厦 1998 20世紀的中国少数民族語言研究 書海出版社
- 戴昭銘編 1994 建設中国文化語言学 北方論叢
- 戴昭銘 1995 說“雅正”——中国古代語文規範理論初探 復旦學報 2 復旦大學
- 戴昭銘 1998 規範語言学探索 上海三聯書店
- 語言文字應用研究所社会語言学研究室 1991 語言·社会·文化 語文出版社
- 劉煥輝, 陳建民主編 1993 言語交際與交際語言 江西高校出版社
- 陳建民, 譚志明主編 1993 語言與文化多学科研究 北京語言学院
- 中国社会科学院民族研究所編, 国家民委文化宣傳司主編 1993~1995 我国少数民族語言使用情况和文字問題調查研究(全4卷) 中国藏学出版社
- 中国社会科学院民族研究所, 国家民委文化宣傳司主編 1994 中国少数民族語言使用情况 中国藏学出版社
- 中国人民大学中文系方言調查實習小組 1988 蘇州方言三項新起音变的五百人調查 吳語論叢 上海教育出版社
- 趙益真, 林少棉 1990 壯漢双語現象的形成和發展 中央民族学院學報 3
- 張清常 1997 北京街巷名称史話——社会語言学的再探索 北京語言文化大学出版社
- 趙麗明 1991 湘西苗族隱語的使用情况和社会功能 語言·社会·文化 語文出版社
- 陳原 1980 語言與社会生活 三聯書店
- 陳原 1983 社会語言学 学林出版社
- 陳原 1988 社会語言学專題四講 語文出版社
- 陳原 1992 中国のことばと社会 大修館書店(松岡榮志編訳)
- 陳建民 1989 語言文化社会新探 上海教育出版社
- 陳炯 1998 法律語言学概論 陝西人民教育出版社
- 陳松岑 1984 北京城区兩代人對上一輩使用非親屬稱謂的变化 語文研究 2
- 陳松岑 1985 社会語言学導論 北京大学出版社
- 陳松岑 1989 礼貌語言初探 商務印書館
- 陳章太 1998 20世紀的中国社会語言学 20世紀的中国語言学 北京大学出版社
- 陳乃雄 1982 五屯話初探 民族語文 民族語文雜誌社
- 都染直也 1992 中国語北京方言における“日本語サ行子音のゆれ”に類似する現象について 甲南大学紀要 84
- 程祥徽, 劉澐冰 1991 澳門的三語流通與中文的健康發展 中国語文 1 商務印書館
- 道布 1996 中国的語言政策和語言規劃 民族研究 6 民族研究雜誌社
- 馬学良, 戴慶厦 1984 我国民族地区双語研究中的幾個問題 民族研究 4 民族研究雜誌社
- 馬学良 1991 建立具有中国特色的民族語言学 民族語文 6 民族語文雜誌社
- 潘家懿 1991 山西晋南的秘密語一言話 語言·社会·文

- 化 語文出版社
- 武占坤, 馬国凡 1988 漢字・漢字改革史 湖南人民出版社
- 傅懋勳 1998 論民族語言調查研究 語文出版社
- 方曉華 1998 新疆雙語教育問題探索 民族語文2 民族語文雜誌社
- 鮑明燁 1980 六十年来南京方言向普通話靠攏情况的考察 中国語文4 商務印書館
- 俞光中 1988 上海話副詞的年齡層次差異 吳語論叢 上海教育出版社
- 游汝傑 1992 漢語方言島及其文化背景 中国文化2 中国芸術研究所
- 游汝傑 1993 中国文化語言学引論 高等教育出版社
- 姚德懷 1996 英文為準與中文為準—香港中文的一個難題 中国語文2 商務印書館
- 余惠邦 1986 略論四川民族地区的雙語現象和雙語教育 西南民族学院学報
- 余惠邦 1995 雙語研究 四川大学出版社
- 羅常培 1950 語言與文化 北京大学出版社
- 羅美珍 1999 泰, 泰語地名結構分析及地圖上的音譯漢字 民族語文2 民族語文雜誌社
- 李建国 1996 傳統語文規範及其現實意義 中国語文1 商務印書館
- 李昌道 1997 香港雙語法律的現狀和發展 復旦学報1 復旦大学
- 李如龍 1998 漢語地名学論稿 上海教育出版社
- 李芳傑 1986 對当前漢語規範問題的幾點看法 語文建設4 語言文字報刊社
- 李明潔 1998 上海市泛尊称使用的社会分層 語言文字學刊1 漢語大辭典出版社
- 龍惠珠 1998 港人對廣東話及普通話態度的定量與定質研究 中国語文1 商務印書館
- 劉虹 1986 大連話語音差異與社会因素之間的關係 語言研究2 華中理工大学出版社
- 呂驥平, 戴昭銘 1985 当前漢語規範工作中的幾個問題 中国語文2 商務印書館
- 呂叔湘 1988 南北朝人名與佛教 中国語文4 商務印書館
- 林倫倫 1996 廣東揭西棉湖的三種秘密語 中国語文3 商務印書館
- Romaine, Suzanne 1994 Language in Society Oxford University Press (土田滋, 高橋留美訳 社会のなかの言語 1997 三省堂)
- S. M. Ervin-Tripp 1972 Sociolinguistic Rules of Address. In J. B. Pride & J. Holmes (Eds.) *Sociolinguistics*. Pp.225-240.

(2000年3月8日受付)

(2000年9月12日修正版受付)

(2000年9月26日掲載決定)